

「朝熊山―伊雑宮」紀行

会員 佐藤 光範

平成18年5月28日(日)、鳥羽で開かれた前日の「いわくらの学芸」が終わって、集まった会員はチャーターしたバスでホテル前から朝熊山―伊勢神宮へ観光に出発した。私は見たかった周辺の磐座や神社があったので、独自に車で移動した。

朝熊山はアサマ山と呼ぶが、麓の朝熊神社はアサクマ神社と呼ばれている。麓の朝熊神社は何時山頂から麓に遷座されたかは定かではないと思うが、13世紀頃には現在位置で祭祀していた記録はあるという。神社が北西向きに建てられているが、神社の真後ろ・南東の方向には朝熊山の最高峰標高555mがある。ご神体(磐座)は山頂に鎮座していた筈だ。(現在、そこには電波塔が立っている。八大龍王のお社は傍に建てられている)岡山でも、遥照山の

山頂に電波塔が立ち磐座は壊されているし、朝熊山の山頂の電波塔は磐座を押し退ける様に山頂を整地している。

現在、朝熊山の磐座と称しているのは、山頂から東のやや低い峰上の巨岩を云い、車でも行ける展望台のある観光地として有名で、説明板には『アサマとはアイヌ語で「朝日が出てキラキラと輝く神を意味する」から、この岩の上で日の出を拝んでいたから、朝熊アサマ山と呼ばれた』と書いてあった。観光案内には『昔欽明天皇(539〜572)の御代に僧暁台ギョウダイがここで修行した時、朝に熊、夕に虚空蔵菩薩が現れたため、この名前(朝熊)を付けた』と書いてあった。(弘法大師だと説明する本もある)

朝熊は漢字が先で発音アサクマがアサマになったのか、発音アサマを漢字で朝熊と書いたのか。暁台が修行に入る前から、この山はアサマと呼ばれていた可能性は高い。

神社が山頂で頑張っておられる京都の愛宕神社などの例もあるが、大抵は人間の横着から、山に登るのを

大儀がって麓に下ろしている。なら「アサクマ」よりも「アサマ」の言葉が先であった筈だ。そのアサマの発音に朝熊と書いたのは何故か。

暁台がここで見たという虚空蔵菩薩は、展望台の近くの「金剛證寺コングウシヨウジ」に、会津の柳津・常陸の村松と並んで三大虚空蔵の一つとして祀られている。

寺には暁台上人が伊勢神宮の鬼門鎮護のため開山したという伝承があるが、金剛證寺の方角は内宮の東方に当たり、鬼門(艮・東北)は麓の朝熊神社の方角だから、この伊勢神宮と関係の伝承は朝熊神社が麓に移動してから作られた可能性もある。現在も内宮には朝熊神社を遙拝する桜宮があるし、内宮の第一摂社とされている。

現在の金剛證寺の境内は静寂で、参りしても気持ちがいい。だけど、ここは14世紀頃奥の院では狭すぎるとして移動してきて再建された場所。奥の院(朝熊岳呑海院)への道には巨大な卒塔婆が林立する。暁台が無念で祈った場所に建つ奥の院の本堂は、八大龍王を祀る山頂に向い

ている。今見ることの出来ない磐座は、山頂にあったことは間違いないと確信した。山歩きのついでに、12世紀の経塚群も見えて来た。紀伊熊野の経塚とは形態に違いがあった様だ。

アサマの語源が、アイヌ語からか、弥生・古墳時代の言葉なのかも問題だけど、岡山の熊山石積み遺跡を追究している私にとって、マの発音に熊の字を当てる理由が知りたい。

アサマは大抵「浅間」の字を当てている。富士山本宮「浅間センゲン大社」は社伝で『孝霊天皇の御代に富士山が噴火したので垂仁天皇の御代に浅間大神を祀った』という。長野県の松本市の浅間アサマは温泉で有名である。温泉は噴火・地熱と関係する。軽井沢の浅間山(標高2560m)も活火山だ。

古い地名で倭名類聚抄に出る但馬国浅間郷があるが、現在の兵庫県養父市(旧八鹿町)浅間に比定されている。兵庫県までアイヌ語が来ているのだろうか。八鹿町の浅間は須留岐山の南側の谷間で、東側は浅間峠のある山。日の出の朝日とも、火山

とも関係はなさそう。

旧八鹿町には式内社が、浅間地区の当時は葛神社と言われていた浅間神社を始めとして七社もある。倭名類聚抄の葛葉クズハ郷は現在の交野市楠葉。葛原クズハラ郷は現在の宇佐市葛原。クズ(葛)に続く「ハ」も「ハラ」も銅関係の言葉。

古代地名語では「アは冶金する。サは細かい鉱石。マは銅地名語」で、銅が取れていた場所に付く地名だと推定はしている。マグマの溶岩の中に色々の金属が含まれ、取り出しやすい銅が地名として一般化したと思う。旧八鹿町には日畑という銅のハタ氏族が居て地名になった様な土地がある。

問題の伊勢の朝熊山のアサマと銅の関係を私なりに解釈すれば、①白銅鏡が二面奉納されていた。(朝熊山で冶金した鏡か)②内宮からの遥拝所を桜宮と呼んでいる。(サクラは古代地名語で「サは細かい鉱石。クは銅・金属言葉に続く言葉。ラの発音は銅を意味する」から銅の朝熊神社を遙拝する銅の宮ということになる。(桜、佐倉の地名の所では銅

が取れていた)③朝熊神社の主たるご祭神が大歳神であること。この神の兄弟に、ハタ氏族の祭祀する宇迦之御魂ウガノミタマ神がおられるから、大歳神も金属の神様と推定出来る。

問題は「マ」の発音に熊の字を書いた理由。分らないが、「マ」の発音は銅を意味するが「クマ」の発音も銅を意味するのかも知れない。球磨クマ川の流域や愛媛県の久万クマ地方も調べる必要がある。銅冶金をする南方海洋民族が関係している様に思える。

朝熊山で時間を費やしたので、南側の志摩市磯部町に急いだ。天の岩戸(恵利原の水穴)は間違いなく石灰岩の洞窟だ。石灰岩のある場所では銅が取れていた。(秩父、秋吉台がいい例)おうむ岩(高さ49m, 幡127m)の大きさに圧倒された。一人だったから「語り場」「聞き場」の確認はとれなかった。鸚鵡なのか。山彦なのか。

磯部町のインベとは石部とも書かれて、各地に式内社石部神社がある。それ等を調べたことがあったので、

磯部町にある「伊雑宮」にはお参りしてみたかった。

現在は「イザワの宮」「イゾウグウ」と呼ばれているのは、曾てこの地が志摩国答志郡伊雑イサハ郷であったからだ。

不思議なことがあるもので、出発前の朝食の時、私も同室の三人が食べていたテーブルに会員の女性が一人同席された。今回の学会に初めて参加したという伊豆から来られた井沢さんという方。イザワの名前もイサワと同じで、イサワは昔のイサハに繋がる。

古代地名語で「イの発音は鋳物する。サは細かい鉱石。ハの発音は銅」で井沢さんの居られる伊豆は銅・金属の取れていた場所だというのも偶然か。

又、出発前の偶然の立ち話だったけれど、愛知の中根さんが「伊雑宮の裏の山道を行くと岩がある」と教えて下さる時間があった。

この宮は『倭姫命世記』で垂仁天皇の御代(4世紀中頃)に巡行された時、伊佐波登美イサハのトミ命がここに神宮を営んだのが始まりとい

う。式内社として記載されている「粟嶋坐伊射波神社二座」というのがこの「伊雑宮」だとなっているが、中世、近世時代には二座とは伊射波登美命と玉柱屋姫とを祀る宮だと信じられていたという。明治になって天照大神の御魂と定められて今日に至っている神社である。因に「粟嶋坐」のアワとは、銅鑿を多数残した阿波アワ国のアハと同じで「アは冶金する。ハは銅」で銅冶金の場所に付く地名である。

ここは宮内庁直轄の神社だから、磐座祭祀などと問えば不敬罪だろう。中根さんに教わった神社の裏に廻ってみた。真後ろ500m先の山の中心に経1mの石数個と高さ2mの石1個があり、石の前にブリキの小型鳥居があり、傍に徳利5本が供えてあった。倭姫を歓迎した地元イサハの豪族・トミさんとは「トは銅の意味。ミは銅の神様、銅」の意味で銅冶金をしていた豪族であったに違いない。

「因に、富トミの地名の場所では銅が取れていた」

余り問題にはなっていないが、松阪市の櫛田川の左岸に射和イザワと

いう地区があり『倭姫命世記』の伊射波登美命が仮宮を創った所という。式内社・伊佐和神社も鏡座する。このイザワの地名がどこまで遡れる地名かははっきりしないが、鎌倉期には隣接する丹生産の丹砂（水銀鉱石）から伊勢白粉を作っていたという。

このイザワの伊佐和神社から直線距離で10キロ離れた堀坂山ホツサカサン（標高757m）の山頂には浅間神社がある。イサハとアサマとはペア地名だ。

伊雑宮から朝熊山山頂へは直線距離9キロで、方位は北14度西（大河内さん岩田さんの羅経図では2.5基準角）の関係だ。

ペア地名はこのニカ所の三重県だけではない。浅間地名のある養父市内（旧養父郡）には、倭名類聚抄の石禾イサハ郷があった。現在の朝来市和田山町西部ではないかと比定されている。石禾郷に式内社はないが、中心地と思われる土田ハンダから浅間との直線距離は10キロ。方向は北17度（羅経図では3基準角）になる。ハンダとはハタに海洋民族

が使う鼻音のンが入った言葉。因に、旧石禾郷の東に接する旧東河トガ郷には式内社・刀我石部トガノイソベ神社が鎮座する。伝承では物部十千根モノノベノトチネ大連が創建したという。物部は銅冶金の氏族である。当地は曾て夜久野火山の溶岩が流れ来た土地だという。

軽井沢に浅間山があったのか、浅間山があるからカル・イザワになったのか、この地名ペアも偶然ではない筈。

山梨県に石和イサワ町があり、石和温泉が八田ハツタ集落にある。ハツタはハタだ。隣の一宮町に浅間神社がある。垂仁天皇8年に神山の麓に創建し（現在山宮神社がある）、点観7年（865）に現在地へ遷座したという。石和から浅間元宮まで直線距離7キロ、方向はほぼ東になる。

アサの発音の言葉は、浅間の浅とも書くし、朝熊の朝とも書く。阿波国の式内社・大麻比古神社のアサも発音からくる意味は同じではないだろうか。香川県に大麻山があつて、麓から銅鐸銅鉦が出土し、そこにも

大麻神社（ご祭神は天太玉命）が鎮座する。布刀玉フトダマ命は忌部の遠祖だとされているが銅冶金の祭祀者だったのか。

伊雑宮も朝熊山山頂上の元磐座を拝む様に建てられ、山頂へ行かなくなつたら、仮りの磐座を線上の神社の真後ろに祀る。現在は格を付けて伊勢神宮の笠の下におられる。磐座信仰の名残りの神社などとは言っておられない。

近くに伊雑宮所管の佐美長サミナガ神社があるので、お参りして来た。小さい独立した丘の上に神社だけがある。だけどこの神社は式内社「粟嶋坐神乎多之御子アワシマニマスカムオタノミコ神社」で、以下の様な伝承を残している。『垂仁天皇27年、芦原の中で鳥が鳴いた。倭姫命が怪しんで大幡主オオハタヌシ命に見せに行かせたところ、一羽の真名鶴が一茎に千穂の茂る稲をくわえて鳴いていた。倭姫命は「愈々お田を作りて大神に献ずるなり」といい、その稲を伊射波登美命に命じて拔穂させ、大幡主命の娘・乙姫に清酒を造らせ御饌の料にあてた』

この伝承から推測出来る事柄は、①地元にはハタ氏族を推定さす「大幡主命」が居た伝承はハタ氏族が盤踞していた。②鳥が真名鶴の「ツル」であること。トリの発音は鳥取の様に「トは銅。リは銅鉱石」で銅を意味する。又、ツルの発音は、南方海洋民族が最初に上陸した鹿児島に都留・水流ツルの言葉が多いから、南方海洋民族を推定さす。③乙姫に酒を造らせた。銅の大神オオミワ神社、ハタ氏族の松尾大社も酒樽を奉納している。サケは「サは細かい鉱石。ケは銅」サカは「サは細かい鉱石。カは鎔かす」で金属冶金言葉にもなっている。④神の名前・乎多之御子オタノミコに似た発音「乙多見オタミ」の地名が、ハタ氏族の多い岡山にもあること。等で、これらの纏めを考えながら帰途につく。まだ通つたことのない国道を選んで奈良まで、奈良からは通い慣れた阪神高速で一路倉敷へと。

了